

# 防衛講演会



講師 青山 繫春 氏

日時 平成23年3月4日（土）

場所 神戸市  
（湊川神社 楠公会館）

## 演題 「祖国はよみがえる」 **（要旨）**

青山講師はまず、日本の戦後には67年間、一貫して、思い込んできたことがあると指摘した。

それは「勝った側の言う通りにせねばならない」という思い込みである。特に安全保障について、世界の常識や国際法とフェアに照らして根本的な思い違いがある。例えば、自衛隊には、国民と国家を護るために大きな問題が2つある。

一つは、自衛官には、世界の主権国家の防衛力に必ず備わっているネガティブ・リスト（これだけはしてはならないリスト）ではなく、ポジティブ・リスト、すなわち「これだけはしてもいいよ リスト」だけがある。だから自衛隊は、特別許可がないと国も国民も護ってはいけないという、世界で唯一の存在だ。そのために国民が拉致されても、領土が侵略されても、防衛出動が遅ればせに閣議決定されない限り、何もできない。だからこそ実は、拉致事件も繰り返され、竹島も実質的に奪われ、尖閣諸島が危機に瀕している。

二つ目は、自衛官が防衛のために行動したことを公正に評価する「軍法会議」がないことだ。そのために自衛官が国民を救うため行動しても殺人罪や傷害罪に問われる恐れすらある。

同じ敗戦国ドイツの首都ベルリンで、ドイツの庶民と連邦陸軍将軍からそれぞれ「日本と北朝鮮はあんなに近く、あんなに優秀な自衛隊がいるのに、なぜ拉致された国民を取り返しに行かないのか」と聞かれた。敗戦国だから取り返しに行ってもいけないというのは日本の過（あやま）てる常識、世界の非常識だ。

日本は、先の大戦で自国民だけで300万人の犠牲を出した。今こそ「戦争に負けたから」ではなく「負ける戦争を二度としないために」を基準として考えるべきだ。それが、硫黄島の栗林中将 はじめ多くの将兵、そして沖縄の学徒看護隊の少女たちを含め、たくさんの国民が己を捨てて祖国のために生きた気持ちに答えるための責任、現代の祖国に生きるわたしたちの責務ではないか。